# 難波翻譯-【文學類】

## 〈三浦哲郎さんを悼む〉出久根達郎　　一字一句　誠実に

誠懇的寫下一字一句　哀悼三浦哲郎先生

**（朝日新聞 WEB 版（Asahi.com　2010.8.31））**

**リアルタイムで『忍ぶ川』を読んだ時の興奮を、忘れない。すごく新しい形式の小説を読んだような気がした。時代の先端をゆく内容と文章だ、と読みながらふるえた。事実は逆で、古風すぎるほどの純愛物語なのである。一語一語が正確無比、刻まれたような文章で、高度成長で世の中が浮かれ、「つっころばし」が持てはやされる時代であったから、端正なまじめさは、かえって新鮮に見えたのだろう。**

那種一拿到小說『忍之川』就急忙翻開來閱讀的興奮感怎麼也忘不了。邊讀邊顫抖心裡也猜想：感覺這會是本以新形態寫出來的小說，還是會像走在時代尖端的文章一樣呢。事實卻是相反的，這可是本相當古風的程度的純愛故事。在高度成長中的現代社會中出現這樣一字一句都切切實實的，如同刻劃紀錄下來的文章，就像看到「歌舞伎中軟弱又滑稽的正義腳色」出現一樣，反而有種新鮮感吧。

**一九六一（昭和三六）年、『忍ぶ川』は第四十四回芥川賞を受賞した。私は十七歳、古書店の店員だった。店の近くが『忍ぶ川』の舞台の深川木場であったし、小説のヒロインの境遇が自分と似ていたため、一層共感したのである。それに作者の言葉へのこだわりを、好ましく思った。「こころぼそげにそういって」など、やさしい語に漢字を当てず、「翳（かげ）」「馬橇（ばそり）」などルビが必要な漢字を遣う。点画の少ない漢字はお好きでないらしい、と判断した。**

一九六一（昭和三六）年，那年、作品『忍之川』得到第四十四回芥川獎受賞。那時我十七歲，還是個舊書店的店員。在那間店的附近就是故事『忍之川』為舞台的"深川木場"，因為女主角的遭遇跟自己很相像，所以更加同感身受。如此一來，更能體會作者對於句子的執著了。例如：「不知怎麼了心中莫名感傷寂寞…」的句子貼心的不用漢字來表現，但是「影子」「馬橇」等詞就使用漢字且標上假名使用。從這地方看的出來作者也不喜歡筆劃較少的漢字。

**やはり『忍ぶ川』に感動した友人と、ある日突然、三浦さん宅を訪ねたのである。失礼だとは思わず、熱烈なファンの特権くらいに考えていたのだから、どうしようもない。**

曾經和深受作品『忍之川』感動的友人，在某天突然一起去拜訪三浦先生的家。若以這是熱情粉絲才有的特權的話，似乎也不覺得失禮了吧。

**三浦さんは将棋盤を前にしておられた。隣が書斎で、夏のことで境の襖（ふすま）が開かれていた。座り机の上に、原稿用紙が置かれてあった。仕事中にお邪魔し申しわけありませ**

NANIWA Translation

**ん、と恐縮した。いや、退屈しのぎに独り将棋をしていたんです、ちょうどよかった、と頬笑（ほほえ）まれた。三十歳の三浦さんは、やせて背が高く、俳優と見まがう美青年であった。白絣（しろがすり）の浴衣を召していた。**
當時三浦先生站在將棋盤前。旁邊是書房，因為那時是夏天，隔間的紙門為了通風打開著。矮桌上放著稿紙。''真是非常不好意思，在你工作的時候來打擾你感到非常抱歉。''''不會，你來的正剛好，因為無聊想玩玩將棋打發時間。''他微笑著說著。三十歳的三浦先生，瘦高的他穿著白絣樣式的浴衣，是一位會把他看錯成偶像演員的帥氣美青年。

**居心地がよかったせいで、ずいぶん長く話しこんでしまった。辞去して、広い車の通りを歩きながら、振り返ると、田んぼの中にポツンと三浦さんのアパートがあり、二階の窓から私たちに手を振っているのであった。表情は見えず、白い浴衣が旗を広げたようだった。私たちも立ち止まり、何度も辞儀をし、手を振った。**
因為感覺十分投緣不小心就聊了好久。告辭後，走在寬廣的道路上往回頭看，三浦先生的公寓孤拎拎的佇立在田埂中，而他在二樓的窗邊向我們揮著手。看不見表情，只看到白色的浴衣像旗子一樣揮舞著。我們也幾度停下腳步並揮手回禮。

**友人が興奮しながら言った。先生は暇をつぶしていたとおっしゃったけど、将棋の駒はでたらめに並んでいた。気を遣わせまいと、嘘（うそ）をつかれたんだ。私も早口で言った。机の上の原稿用紙は書きかけのものだった、万年筆のキャップが外れていた、寸前までお仕事をなさっておられたんだ。私たちは感動のあまり、今しがた目にしていた事柄を、こもごも語っては、確認しあった。そうして作者その人が、『忍ぶ川』の主人公と変わらず誠実なことに、お互い涙ぐんだ。自分たちが小説の中にいるような、そんな錯覚に捉（とら）われたのである。**
「老師說他要打發時間正玩將棋，但為何將棋卻是凌亂排著呢？」朋友興奮的問著。
我搶著回說：「老師是為了不要讓我們不好意思，所以說了謊。桌上的鋼筆蓋子不是打開的嗎？所以老師是停下手邊工作的啊！」因為我們實在是相當感動，把剛才所看到的事情相繼的討論起來。認識到作者這個人就如同『忍之川』裡的主角一樣的誠懇確實這樣的人，我們都不禁眼框裡泛著淚光。

**あれから四十九年、三浦さんは少なくとも作品の上で全く年をとらず、『忍ぶ川』のういういしい白絣のまま、一字一句おろそかにせぬ文章を維持して亡くなられた。**
之後在三浦先生到四十九歲的生涯中，作品中看不出來他年紀的增長，都如同小說『忍之川』一樣純潔無暇，一字一句毫不隨便表現直到他的離開人世。

**「最初の一枚が、竹の幹を駆け登るようにして舞い上ると、それを追って、あとから幾十枚もの葉がつむじを巻いてくるくると舞い上った」**
「宛如第一片葉子使勁的攀登著竹子的莖幹往上飛舞，隨後的幾十片竹葉也緊跟的，像漩渦般

NANIWA Translation

的轉阿轉阿的向上飛上天空。」

**初期の作品『風の旅』の冒頭、目の前で風が生まれる瞬間の描写である。何の技巧もない、しかしまるで自分が見ているような臨場感のある文章である。これが三浦さんの巧まぬ技巧であった。日本語の美しさと遣い方を、さりげなく教えて下さった作家であった。**

這是早期作品『風之旅』開頭的第一句，描寫在眼前的起風的瞬間。沒有使用任何技巧，單純的表現自己看到的卻這麼有臨場感的文章。這個是三浦先生使用技巧不著痕跡的表現。完完全全表現了日本語的美且自然而然的一位作家。

NANIWA Translation